

とあるマッサージ店の無料モニター



## 第一話

乳首とクリトリスのマッサージ、手マンで潮吹きデトックスしましょうね

## 第二話

喉奥とおまんこ、アナル責めと仰向けイラマで、嬉ションしちゃいましたね

## 第三話

思考支配したまんま、二穴マッサージでお漏らししましょうね

## 第四話

お口のGスポット『パラタイン喉腺』マッサージで、喉イキしましょうね

## 第五話

マッサージじゃない本気二穴セックスしますよ。

ん？ 大丈夫。あなたの知らない間に体は調教済です♡



## 第一話

ここ一ヶ月毎日終電帰宅、土日も返上して頑張ってきた仕事で、本日無事クライアントに納品することができた。久しぶりの華金定時退勤で、うきうきしながら駅前を歩いていると、スーツの男性に声をかけられた。

「お仕事お疲れ様です！ 最近こちらでマッサージサロンがオープンしましたので、よかったですらこちらお受け取りください」

清潔そうな短髪に、爽やかな笑みを携えた彼は、私に一枚のチラシを手渡してきた。太字のゴシックで書かれた情報に、私は思わず声が出ていた。

「マッサージ、もみほぐし……え！？ 無料モニターってほんとですか？」

「はい！ まだ開店したばかりでお客様も少ないので……。ぜひ一度体験いただいで口コミお願いします」

「え、どうしよう……」

「モニター募集の枠結構埋まってきちゃってるんで、もしご興味ありましたら早めに連絡いただけると嬉しいです。あ！ 今日このあとは予定ありますか？ もしよかったですらこのままご案内できますが……」

「え、ほんとですか！　じゃあよろしくお願いします！」

残業続きで肩こりと腰痛がひどくなってきたところだったのだ。無料でマッサージが受けられるなんて、今日はあまりにもツいている。口コミは適当に書いたらいいか。良かったらまた通えばいいだけなのだ。

チラシを渡してきた男性は村上と名乗った。村上さんは、店に連絡してきますと私から離れ、電話をしに行った。

「お待たせしました！　じゃあ行きましょうか」

村上さんはニコニコしながら、すぐ近くだという店へ案内してくれた。店は、駅から徒歩五分ほどで、路地裏を進んだ雑居ビルの中にあり、案内してもらえないとたどり着けないような分かりにくいところにあった。

（これはお客さんの入り悪そうだな……）

村上さんの後ろをついていきながら、狭いエレベーターに乗った。彼は慣れた手つきで階数ボタンを押すと、私の方へと振り向いた。

「お仕事でお疲れですか？」

「あ、はい。最近残業続いてまして……」

「じゃあなおさらラッキーですね！ 先生のマッサージは本当に気持ちいいですから。僕も営業で足がパンパンになった時に、もみほぐしてもらったんですけど、本当にすぐ楽になりましたから」

「本当ですか！ えへへ、楽しみです」

「お客さまはもっと気持ち良くしてもらえと思っていますよ」

「え？」

どういふことですかと聞く前に、エレベーターが行き先階に着いてしまったので、そのまま村上さんの後を着いて行つた。

ここです、と彼が店の扉を開けると、ふんわりと優しいアロマの香りが漂ってきた。店内はちょうど良い音量で、ヒーリングミュージックがかかっている。

「いらつしやいませ。お待ちしております。まずはこちらで問診票のご記入をお願いします」

白い施術着を着た男性が、柔和な笑みを浮かべながら、私を奥のソファ一席へ案内した。彼が『先生』のようだ。

私は、問診票に従い、腰痛・肩こりに悩まされていることを記入したが、問診票下部の誓約書欄で【施術を途中で止めることはできません】という一文に目が止まった。

「ん？ あの、最後の誓約書欄なんですけど……これってどういうことですか？」

おずおずと伺うと、先生はパチリと目を瞬かせた後、くすつと小さく微笑んだ。

「ああ、これ驚きますよね。施術を途中で止めるとあまりマッサージ効果がないので、お客さまには最後まで施術を受けていただきたいんです。施術自体痛みなどはありませんし、他のお客様も途中でやめる方はいらっしゃいませんから、あまり深く考えなくて大丈夫ですよ」

「なんだ、そうなんですね！」

私は安心してサインし、先生に問診票を渡した。先生は、ざっと問診票を眺めると小さく頷いた。

「……なるほど、肩こりと腰痛ですね。承知しました。では施術室にご案内いたします」

案内された施術室は薄暗く、オレンジ色の間接照明とアロマランプの灯りがやさしく揺れていた。

「こちらに施術用の下着とバスタオルを入れておりますので、着替えてからベットでお待ちください。お荷物はそちらのロッカーに入れてください。では、私は一旦失礼



いたしますね。またお声がけします」

先生は、施術用の下着とバスタオルが入ったカゴを渡すと出て行った。

（下着にならなきゃいけないのか。そっか、服の上からだマッサージしにくいもんね……）

肌をさらすのは想定外だったが、疲労いっぱいの身体を一刻も早く癒してもらいたかったので深く考えず与えられた下着を身につけた。

しかし、さらに想定外なことが起きた。

与えられた下着があまりにも際<sup>きわ</sup>どいのだ。紙素材のブラジャーとパンツはどちらもすけすけで、ブラジャーは乳首が隠れるだけの面積しかなく、パンツに至ってはTバツクの形をしており、前部分をほんの少し隠せるだけで、ほとんど紐だ。

初対面の男性の前でこんなものを身に付けるなんて。今まで交際してきた男性の前でもないのに。

どうしようと固まっていると、扉の向こうから「お着替えできましたか」と優しく声をかけられた。慌てて、もうすぐ終わりますと答えてしまい、急いで服を脱ぎ、際どい下着をつけバスタオルでできる限り身体を隠した。

「だ、大丈夫……です……」

どこが大丈夫なんだ、と心の中で突っ込みながら、心許無くバスタオルの裾を引っ張る。先生は、オイル等の道具が入った箱を持って入ってきた。

「すみません、急かしちゃいましたか？」

「あつ、いえ、全然！……その、下着がつけにくくて……」

「そうでしたか。皆様最初はびっくりされるんですけど、すぐ慣れますよ。私も施術時以外で不用意にお客様を触れたり見たりすることは決してありませんので、どうぞリラックスしてくださいね」

先生は私の緊張を解きほぐすかのように優しく微笑んだ。その清潔で誠実な雰囲気から、私はやっと肩から力を抜くことができた。

「では始めますね。まずベッドに浅く腰掛けてください。気になるようでしたら、お膝にバスタオルをかけてくださいね」

「はい」

先生はベッドに乗り上げると、私の後ろに座り、肩周りをほぐしにかかった。残業続きで凝り固まった肩が、ゆつくりとまわされて、じんわり熱くなってくる。

「だいぶ凝ってますね。では頭の後ろで腕を組んでもらえますか？」

そうです、そのまま胸を開いて」

「は、はい」

「そう上手です。このまま二の腕から脇の下にかけてリンパを流していきますね」

男の大きな手が、両の二の腕をぎゅっと掴み、そのまま一気に脇の方へスライドさせてゆく。男性に触られること自体久しぶりなので、思わず身体に力が入ってしまう。「力入ってますよ。リラックスです」先生が耳元で囁いた。

「ひゃっ……す、すいません」

変な声が出てしまったが特に指摘されることなく、そのまま施術が続いていく。肩周りがぼかぼかしてきて、疲労に効いているのを実感する。

（気持ちいい……っ、ん……？）

すっかり力が抜けて男に身を委ねていると、先生の手が二の腕から脇の下にスライドさせる時にだんだんと胸に寄ってきている。指先が、乳首に当たるか当たらないかギリギリのところまでやってきて、段々男の指にばかり意識がいつてしまう。

（……気のせいだよな）

まさかこんな誠実そうな男性がセクハラまがいなことをしているとは思えず、自分の気のせいだと思い直したその時、男の指先がちゃんと乳首に当たった。

思わず「ん！」と声が出てしまったが、先生には聞こえていないようで、施術を続けてくる。先生の指が乳首に当たると、身体がビクッと震えてしまい、声を我慢することに必死になってしまう。

「んっ……ふっ……ふ、……っ！」

変な声が出ないように、唇を噛み締め鼻で呼吸をする。すると、先生は手を止めないまま言った。

「また力入ってきちゃってますね。リラックスした状態の方が施術効果も高いですから、力抜きましょうか」

「は、はいっ……あっ……！」

「んー難しいですかね。ではリラックスできるように、ちょっとこちら触らせてもらいますね」

先生はそう言うのと、下着の上から、両手で乳首をクリクリと弄り出した。

「えあっ!? っ? ……ひっ!? せ、せんせいッ！」

「こちらをしつかりマッサージすることでオキシトシンが流れ、しつかりリラックスすることが出来ますよ」

「はっはいっ、ん……う……ふっ」

「お客様は施術前からしつかり乳首を勃起させておりましたから、先にこちらのマッサージをした方がよかったですかね？　気が利かず大変申し訳ありません」

「え！　そ、そんな！……んあっ！」

そんな恥ずかしいことを大真面目に言われてしまい、身体がカーッと熱くなった。あんなに優しく微笑んでいたのに、乳首が勃起してるとずっと思われていたなんて、恥ずかして死にそうだ。

先生は一旦手を止めると、私の胸にゆっくりと温感オイルを垂らし始めた。

「しつかりリラックスしていただくために、オイルマッサージさせていただきますね」

「え！？　あつ、」

「オイルでブラジャーが透けて、勃起した乳首がよく見えますね。私が触る前から、ずっとこんなに勃起させてたんですよ」

「~~~~っ！」

「お客様は、こういう風に人差し指と親指で挟んでくりくり触られるのと、」

「んあっ！　ひ、いっ、！」

「手のひらで胸全体を揉み込んで乳首を押しつぶすように触られるのか、」

「うあつ、くくくつやあ、んぐくつ！」

「どちらがお好みでしょうか？」

「いやあつ、やだ、なん、で……っ！」

こんなのおかしいと涙ながらに振り向くと、先生は申し訳なさそうな顔で、あまりにも真面目に私の乳首を弄っている。

「お客様のお好みのやり方が一番早くリラックスできるかと思しますので、恐れ入りますが選んでいただけますか？」

（えー？ 私リラックスできてないから……？）

私のせいでこんな恥ずかしいことをさせているのかと気づき、意を決して答える。

「あ、の、……」

「はい」

「……人差し指と親指でお願いします」

「人差し指と親指でどのように触りましょうか？」

「くくくつ！ ひ、人差し指と、親指で……く、……くりくり、いじってください……っ」

「承知しました。ではこの勃起した乳首を、人差し指と親指でクリクリといじらせて

いただきますね」

先生は優しく微笑むと、ぎゅっと私の乳首を摘んだ。そして、こよりを作るようにクリクリと弄り出した。ときどき、ピンっと人差し指で弾かれて、お股の奥がむずむずしてくる。力を抜くための施術なのに、どうしても気持ち良くなってしまう声が我慢できない。思わず頭の後ろで組んでいた手を離して、口を覆う。すると、先生にぎゅゅっと乳首をつねられた。

「えやあっ!？」

「駄目ですよ。きちんと姿勢を保ってくださいね」

声は優しいのに、まるで咎めるかのように、乳首の形が変わるほどつねられ、そのまま引つ張られる。

「ご、ごめん、なさ…っ! ふっ、ん、……こ、こえ、がまんっ……できない……っ!」

「ああ、大丈夫ですよ。こうやって乳首をくりくりくりくり弄られると気持ち良くなってしまうもんね。声は我慢しなくて大丈夫です。施術ですから、私も全く気にしません。お客様の感じるまま、自然体で施術を受けられた方が良いかと思います」

「……っ! は、はいっ……んう、ざあっ……はあ、はあ、」

「力なかなか抜けませんね。リラックス、リラックス……」

「あう！ はいっ……あッ……あ！」

先生がぎゅつと乳首をつねるたびに、身体に電気が走るような感覚がして肩が跳ねてしまう。オイルで濡れたブラから透ける乳首が、ビキビキと勃っていて、その光景だけで身体が熱くなる。子宮が痛くなるくらいに疼いてるのが分かる。

（どうしよう……もうイきたい……っ）

いつも自分でする時みたいに、乳首を触りながらクリを弄ってイきたい。マッサージが終わったら早速自宅に帰って、エッチな動画見ながら思いっきりオナニーしよう。早く、早く終わってほしい。

意を決した私は、恥を忍んで口を開いた。

「あっ、あのっ……!!」

「どうされました？」

「あっ……んうっ、ゆ、ゆびっ！ も、いいっ……です……っ！」

「申し訳ありません。ご不満でしたか？」

先生は申し訳なさそうな顔をしながらも、乳首をいじる手を止めてくれない。

「あっ、……ま、まって……っ！ も、もう大丈夫、ですっ！」



「しかし……」

「んあつ、り、リラックスできたからあ……！　ち、ちからっ！　あんっ、ぬ、ぬけました……っ！」

「そうですか？　では承知しました」

先生はしぶしぶ手を止めた。

やっと終わった。やっとマッサージに戻ってくれる。はあはあと肩で息をしながら、後ろの先生に体重を預けた。先生は私の肩から腕にかけて摩りながら、うんうんと頷いた。

「うん、しっかり身体が熱くなって、良い状態になってますね」

「はあっはあ、はい……、ありがとうございます……」

「しかし弄りすぎて、もともと勃起していた乳首がびんびんに腫れてしまいましたね。ブラジャー、もう意味ないですよ。こんなに勃起してますから。ブラジャーの上からでもしっかり乳首が腫れてるのがわかりますね」

「……っ！？」先生の言葉に、一気に顔が熱くなる。

「ではこちら外させていただきますね」

「え！？？」

先生がごく自然に紙のブラジャーを外してしまったので、私は慌てて手で胸を隠した。先生は、ぐっしりと濡れたブラジャーをゴミ箱に入れると、苦笑した。

「申し訳ありません。普段は施術着を外すようなことはないんですが、お客様が乳首をしっかりと勃起させられてるので」

「~~~~っ！、す、すいません……」

「ではこのまま腰回りのマッサージに入らせていただきますね。横になってください……はい、そうです、膝は立たせてくださいね」

「は、はい」

「ああ、胸が気になりますか？　そうですよね、これだけ乳首びきびきに勃起してますからね。気が利かず申し訳ありません」

（言わなくていいのに……っ）

先生は微笑んで私の上半身にバスタオルをかけると、ベッドに乗り上げ、膝立ちした私の足を広げた。正面からお股を見られて、恥ずかしさから目をつぶってしまう。（普通の施術なんだから、余計なこと考えないようにしなきゃ……リラックス、リラックス……）

心の中で何度も自分に言い聞かせる。すると、先生が「ん？」と声を上げた。目を

開けると、先生が私の股間を凝視している。

「ああ……お客様、濡らしてしまっただね。オイルを垂らそうかと思ったのですが、これだけ濡れていれば必要ありませんね」

「えっ、そ、そんなっ……!!」

「はい。パンツが透けるくらい濡れちゃってるので、クリトリスから膣口までよく見えます」

「~~~~っ!!」

思わず足を閉じようとする、先生は確かな力でそれを遮る。

「大丈夫ですよ。さきほどの施術が気持ちよかったですね。身体が素直に反応して、リラックスできている証拠ですから。良い傾向ですよ」

「そ、そうですか……」

「はい。では腰回りのマッサージを始めますね。……うん、ああ、だいぶ凝ってますね。長時間座つてると股関節部分固まっちゃいますからね」

「はう……っ!!」

先生はVラインをすりすりと摩り出した。お股を曝け出した状態で、こんな際どいところを触られるなんて、恥ずかしくて手で顔を覆ってしまう。もうずっと身体が熱

くてたまらない。

「ん？ちよつとしこりがありますね」

突然、先生は私のクリトリスをゆつくりと撫で始めた。突然の明確な刺激に、お尻がびくんと跳ね上がる。

「えあ！？　　やっ！！　　ま、あッ！　　まってえ！」

「パンツの上から触らせてもらってますけど、痛いですか？　　あー……すごいな、これ」

「や、やえてっ！　それッ、それ、ちが、あんッ……っ」

「え？　いやお客様、こちらすごく腫れていますよ、わかりませんか？　　これです、これ」

先生は私に分からせるように、クリトリスをトントンと指の腹で押したり、二本の指でクリトリスを挟んで左右に乱暴に動かしたりした。くちゆりくちゆりと恥ずかしい音が聞こえてくる。

「ちよつと失礼しますね」

先生は、ほとんど意味をなしていなかった紙パンツをいとも簡単に取り払うと、直接クリトリスをしこしここと扱き出した。

「まっで、やあっ！ あッ、ち、ちがつ、ちがうぐ……っんあ！」

「違うって何が違うんですか？ こんなパンパンに腫れてるんですよ？ ほら」

「あざッ、んううッ！ だめえ……ッ！」

「何が駄目なんですか？ きちんと言ってもらわないと分かりません」

「ぐぐッ！ ひっく……んうっ、えやあ……ひっく……」

「泣いても困ります。ほら、こんなにピンピンに勃起上がってるの、なんですか？ しこりじゃないんですか？」

「そぞ……ッ！ ひっ、……くッ、くり、クリトリスっ……うぐッ！」

「え？ クリトリスですか？ パンツの上からでも分かるくらい大きくなってるのが？ じゃあこんな風に触られると気持ち良くなるんですか？」

先生はそう言うと、手のひら全体でクリトリスを擦り上げるように、手首を何度もスナップさせた。

「あぁ……ッ！！？ そぞ！ だ、めえっ！！」

ちゅくちゅくちゅくちゅくと、手の動きに合わせていやらしい音が聞こえてくる。

さきほど乳首をたくさん弄られて疼いていた身体は、歓喜していた。もうすぐにでも絶頂を迎えそうだったが、こんな所でイッてしまえば、とんだ変態女と思われるんじ

やないかという恐れが、私の理性をなんとか繋ぎ止めていた。

「あーすつごい……えっろいなあ、すぐイクねこれ……」

先生の独り言は、私には聞こえていなかった。

「とめでえッ！、ひゃあああッ……あ、あ、あ、」

「気持ちいいんですか？ クリトリスくちゅくちゅされて感じてるんですか？」

「やッ！ あ、あ、あッ！！」

「勃起したクリトリスしこしこされて気持ち良くなってるんですか？ ん？」

「~~~~つぎもちいッ！ きもちいッ！！ あ、あ、あッ！ あッ！！」

短くなる喘ぎ声に合わせて、先生は指を早めた。

——くちゅくちゅくちゅくちゅ、にちやにちやにちや……

いやらしい音がどんどん早くなる。快感を逃すように自然と腰が上がって、背中がエビ反りになってしまう。

「あッ！ あッ！ あッ！……いくッ！！ いくいくいくッ！！ イグッッ

！！！！ ~~~~~んぐっ！♡♡♡……~~~~~ッ！！♡♡♡」

一度大きく腰を振って絶頂すると、あとはかくかくと腰を振って絶頂の余韻を逃す。しばらく情けない腰振りをした後、ベチャッとお尻をベッドに沈めた。

(思いっきりイっちゃった……)

はあはあと肩で息をしながら、ぼんやりと天井を見上げていると、先生が心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「大丈夫ですか？」

「ハアッ……ハアッ……はっ……はい……す、すいませ……ハアッ……」

「いえ、こちらこそクリトリスとしこりを見間違えてしまい大変申し訳ありませんでした。こんなにクリトリスが勃起しているとは思っておらず……」

「~~~~ッ！ い、いいです！……っは、早くマッサージ続けてください！」

「かしこまりました」

先生は微笑むと、再び脚をひらかせ、今度は膣内に指を入れてきた。

「んやあッ！？ えっ、ちょ……っ！」

「ああ、お客様力を抜いてくださいね。こちら腰痛でお困りの方に行っている施術でございます。体内のツボを刺激して、リンパの流れを良くし、老廃物を排出するんです」

「あッ、……んうっ、ほ、ほんとですか……っひびっ！？」

「初めてなので戸惑いますよね。こちらの施術は効果も高く一番人気のものとなっておりますので、ご安心ください」

「そ、そんなンツですね……ッ、あつ、す、すいませ……ッん」

先生の優しい声と笑顔で、一瞬でも疑ってしまったことに罪悪感を覚える。さっきから私が勝手に感じて気持ち良くなってるばかりで、ましてや思いつきりイってしまっただ姿も見せてしまい、先生には申し訳ないばかりだ。

続けますね、と先生は膣内に入れている指を二本に増やし、ゆっくりとかき混ぜ始めた。イッたばかりのおまんこからは愛液がたつぷりと漏れ出しており、ぬちゅりぬちゅりと音を響かせる。

「んう……ッ！ ふ、うん……えあッ……」

「うん、びっしょびしょですね。オイル用意してたんですけどいらないなあ……さっきクリトリスを触られてイッたからこんなに濡れてるんですね？」

「……ッ……んぐ！ は、はいッ！ あっ！ あっ！」

「素直に感じて良い子ですね」

先生はよしよしと私の頭を撫でると、中の指を折り曲げて掻き出すように動かした。めた。



「アデッ！　だ、めッ！　……っあ、あ、！」

「駄目じゃないですよ、素直に私の指を感じてください」

「んう！　ひゃあっ！　あ、ん、ンッんぐう！」

「ああ、声は我慢しないで。気持ちいいならちゃんと声に出しなさい」

「うううッ……は、はいッ！　きッ、きもちいつ、ですっ……ふ、う、」

「うん、気持ちいいね？　ほら、もっと指早くするからいっぱい声出してごらん？」

——くちよくちよくちよくちよくちよ

「ひいいいッ！？　だ、めッ！　あ、あ、あ、だっめえっ！！！」

「駄目って……なにが駄目なの？　ほら、ほら、」

「んあああッ！　せ、せんせっ、はやいいッ！　ひ、ひ、まっで！　まッで！！！」

「待たないよ」

「先生はびしやりと言いつち、もう片方の手でクリトリスをぎゅつと摘んだ。

「~~~~ッ！？~~~~~~~~ッひ♡♡♡」

想定外の刺激に、先生の指をぎゅ~~~~と締め付けて、身体を弓なりにして絶頂してしまった。

「あーあ、イっちゃった」

先生はなぜかすごく楽しそうで、ぎゅうぎゅう締め付けるナカを無理矢理またかき混ぜ出した。

「あッ!?!?!? ぎっで! んぐ!!! ぎッ……でえっ!!!」

「待って待ってってそればかりですけど、しつかり老廃物出していただかないと……。ほら、ね? がんばって」

「んあッ! だめえッ! だえなのおっ! ヒッ、んああつ、さっぎイっだのッ! も、イケないッ!?!?!!」

「大丈夫だから、ね? ほら気持ちいいって言ってごらんなさい」

「やがあッ!!! んぎっ! んう!!! げアッ!!!」

「うん、中膨らんできた。ここいっぱい押してあげるから、気持ちいいって言いなさい」

先生は、さっきよりも強く早く指を動かした。膣内の臍側一点を、思いきり押し揉むように動かすので、クツチャクツチャとかき混ぜる音が大きくなる。

「ひびッ!?!?!? バッ! あッ!!! きもちいいッ!!! きもちいいおっ!!! せんせッ……きちゃうッ、きちゃうからっ!!! あ、あ、あッ、」

「うん、そのまま感じて」

「あ、あ、アツ、あッ！ いいッ、あッんん！ でちや、でちやうううっ……ぎッ……！！」

「そう、思いつき出してごらん？　ほら、ほら」

先生は私の浮き上がった腰をがちり固定して、乱暴に中を掻き出した。

「あゝッ！！……ッ！！……♡♡♡♡……ッ！！……♡♡……つく

「♡♡♡♡!!」

ぶしゅつと勢いよく透明な液体が吹き出す。膾壁が先生の太い指をぎゅうぐつと強く締め付けているのが自分でも分かる。

絶頂の余韻を逃すために、自然と腰がカクンカクンと揺れる。気持ち良すぎて何も考えられない。

「はあつ、はあつ……はあ……」

「ああ、すごいよ、たくさん出てる……」

先生は嬉しそうに笑うと、絶頂して収縮する膣内を確かめるように、ぬちゆりぬちゆりとゆつくりかき混ぜた。

「んう!!? せ、んせい、いま! イッたからあ!!」

「うん、いっぱい出しながらイッたところと見てたよ。でもほら、まだ出さなきや。」



っは！♡♡」

絶頂に合わせて勢いよく液体が出て、先生は手の動きを止めず掻き出すので、ぱちやぱちやと手の動きに合わせて漏れ出てくる。先生は手の動きを止めず、じつくりと私を観察していた。

「うん、まだ出るから。出し切っちゃおうね」

「アッ！？……アッ！ アッ！ アッ！ アッ！ アッ！ アッ！！！！」

一息もつけずそのまままたイッてしまう。身体を弓なりにしながら、バシャバシャバシャバシャつと透明な液体を撒き散らす私を見て、先生はやつと指を抜いてくれた。（……やつと終わったんだ）

初めて何度も絶頂してしまい、もう何も考えられない。ただ、凄まじい快感が終わり、もうイかなくていいんだと安堵した。

「ふふ、お客様よく頑張りましたね。……よいしょっと」

先生は私の頭を撫でると、片足を肩に担いでお股を思いつきり開いた。

え、と顔を上げた瞬間、先生は手のひら全体でクリトリスを覆うと、バイバイと手を振るように素早く動かし出した。



涙の跡が残る頬をひと撫でして、男は笑った。  
「今度は村上も入れて3Pでしようね」





## 第二話

「——さん、……豊田さん！」

何度か名前を呼ばれ、ハッと意識が覚醒する。ベッドから起き上がると、先生が心配そうに顔を覗き込んでくる。施術中にいつの間にか眠ってしまったのだろうか。

「……あれ……？」

眩く声が掠れていた。ベッドに座って肩をマッサージされだしてから記憶が一切ない。身体だけはすっきりしたような、少し気怠いような、不思議な感覚だ。ゆっくりと瞬きを繰り返す私に、先生が微笑んだ。

「ひどくお疲れだったようで、施術が始まってすぐ眠られていましたよ」

「え、そうだったんですか……すいません……」

「いえいえ。最初に肩こりと腰痛が気になるとお伺いしておりましたから、そちらを重点的に揉み解しさせていただきました。揉み解しの好転反応で少しだるいかもしれないが、数日でおさまりますのでご安心ください」

「あ、そうなんです。良かった」

どうりで身体が少しだるいわけだ。先生は私に着替えを促すと施術室から出て行っ

た。

施術着を脱ぎながら、「あれ？」と思わず声が漏れた。私は今、自分の下着を身に付け、上下セットのコットンTシャツとハーフパンツを着ているのだ。

（施術着って、なんか際どい下着みたいなのやっとなかったっけ？）

ひどい夢でもみていたのだろうか。しばらく性的なことにはご無沙汰だし、欲求不満でエッチな夢でもみたのかもしれない。勝手にそう納得し、さっさと着替えて、先生の元へ向かった。

待合室に戻ると、先生はアイステイーを用意してくれていた。ソファに座ってそれを頂く。すっきりとした甘さで喉が潤っていく。ゴクゴクとあつという間に飲み切った私に、向かいに座る先生が「いい飲みっぷりですね」と笑った。

「はい、なんだか喉がすごく乾いていたみたいで」

「ははは、そうですね」

「……え？」

「いえいえ、なんでもありません。おかわりお持ちしますよ」

「あ、すみません」

先生はすぐにおかわりのアイステイーを持ってきてくれた。グラスをテーブルに置きながら、「ところで」と切り出した。

「豊田さん、ここへはもうしばらく通われた方が良いかと思います。一回で完全に腰痛や肩こりを改善させることは難しいですから」

「あ、そうですね。私もそうしように思っていて……、すぐ寝ちやうって相当気持ちよかったですね。もうなあって思ってたんです」

私の返答に、先生は「そうですね、よかったです」と笑った。

「よろしかったら、次回は新しいコースの無料モニターで予約されますか？」

「え！？ また無料モニターしてもいいんですか？」

先生の思わぬ提案に、つい大きな声が出てしまった。先生は大きく頷き、コース紹介のチラシを差し出した。

「もし次回お受け頂くなら、こちらの二人体制の揉み解しコースですね」

先生はそう言ってチラシを指さした。そこには、ここを紹介してくれた村上さんの写真が写っている。

「あれ！？ 村上さん？」

思わずチラシを手にとって凝視する。

「そうなんです。このサロンは私と村上くんの二人で経営しています、アシスタントの彼には営業も兼ねてもらっているんです」

「そうだったんだ……」

「もちろん彼も資格を持っていますし、かなりの腕前です。安心しておまかせさせてもらえればと思っていますが……」

無理には言いません、と微笑む先生。二人のマッサージ師に無料で解してもらえるなんて、そんなの断るわけがない。私は即うなずき、次回の予約をとった。

先生がほくそ笑んでいることも知らずに。



予約当日。前回から2週間も経ったので、身体はすっかりバキバキだ。座り仕事は辛い。今日は定時で上がらせてもらい、私は意気揚々とマッサージ店へ向かった。

店の扉を開けると、白い施術着を着た先生と村上さんがいた。

「豊田さん、お待ちしてました」

「今日は僕も頑張りますからね」

二人にこやかに微笑まれ、奥のソファ一席へ案内された。前回と同じように問診票と誓約書を記入をする。先生と村上さんは、記入した問診票を確認した。

「前回と一緒に、肩こりと腰痛ですね」

「他のお客様では、バスタアップや脚痩せを依頼する方もいらつしやいますよ。よかつたら本日一緒にされますか？」

「え、ほんとですか！ あ、でも……」

追加料金がかかるのではと渋っている、それを察した村上さんは「もちろんモニターなので無料です」と後付けした。

（そんなのやつてもらうに決まっているじゃないか！）

私が大きくなずくと、先生は「ではスペシャルコースですね」と笑い、施術室に案内された。

施術室は前回と違う部屋で、ダブルサイズのベッドが設置された部屋だった。室内は薄暗く、オレンジ色の淡い光の間接照明のみが灯されている。先生が着替えの籠を置き退出したので、さっそく着替えようとして手が止まる。

（……あれ？）

籠の中には、紙素材のブラジャーとパンツしかなかったのだ。

（この前終わったときは、普通の服だったよね……。スペシャルコースの人はこの格好なのかな……。ん？ でも、この前準備されていたのはこの下着だったような……。ぐるぐると思案していると、扉の向こうから「豊田さーん、入っても大丈夫ですかー？」と村上さんの声がして、慌てて着替える。

（う……。やっぱりエッチな感じのやつだ……。）

着替えてみれば、案の定際どい格好になってしまった。乳首が隠れるだけの面積しかないブラからは、乳輪が少しはみ出てしまっているし、Tバックのパンツは、足を少し開くだけでおまんこの筋が丸見えだ。

一時の我慢だと自分を鼓舞し、バスタオルを巻いてベッドに座った。

「豊田さん、失礼しますねー」

先生と村上さんが入室してきた。二人が手際よくベッド周りで施術の準備をする中、私は緊張と羞恥で身体が熱かった。二回目とはいえ、こんな恥ずかしい格好を男性に（しかも今日は二人に！）見られるのは、やっぱり恥ずかしすぎる。そんな私をよそに、先生は「じゃあ始めますね。横になりましょうか」と指示した。

先生に言われた通り、バスタオルで身体を隠しながらベッドに横になる。先生と村

上さんもベッドに乗り上げてきたので、三人の体重を支えるベッドがギシギシと音を立てる。先生は枕元に、村上さんは私の足の間に座った。

すると急に、先生が「失礼します」とバスタオルを剥ぎ取ってしまった。二人の前でほとんど裸のような状態を晒してしまい、恥ずかしくて思わず目をつぶってしまう。先生が優しい笑みを浮かべて、軽く肩をさすった。

「豊田さん、リラックスしてくださいね。前回も申し上げましたが、私たちは施術目的以外で触ったり見たりはしませんのでご安心ください」

先生に続いて、村上さんも口を開く。

「そうですよー。豊田さん、リラックスリラックス。……あ、目を閉じていた方がよかったです。そのままでも構いませんからね。寝ちゃってもいいですよ」

「は、はい」

お言葉に甘えて目は閉じておくことにし、無意識に入っていた力を抜く。すると、村上さんが「あ」と呟いた。

「……先生、これ下着のサイズあってますか？ 乳輪はみでてますけど」

（~~~~っ!?!）

村上さんの言葉に一気に全身が熱くなる。自分でもちょっとはみ出ているとは思っ

たけど、そんなこと口に出して言わなくていいじゃないか！ 心の中で叫びながら、私は必死に聞こえていないフリをし、目を固く瞑り続けた。

すると先生が、

「ああ、豊田さんは乳首が勃起しやすい方で、すぐブラジャーを押し上げてしまうからね。乳輪がはみ出てしまうんだ。前回も、同じだったから気にしないでいいよ」

と、こともなげに言っただけだ。羞恥で全身が熱くなる。私は自分の乳首を今すぐ腕で隠したくなった。先生は前回もそんなふうに思っていたなんて恥ずかしすぎる。そんなに勃っているのだろうか。全裸同様のだから、寒くて生理現象を起こしてるんだ。そう何度も自分に言い聞かせた。

「では、私が上半身のマッサージをしますから、村上くんは下半身をお願いしますからね」

「はい。豊田さん、温感オイルを垂らしますね」

村上さんはそう言うと、足首から鎖骨まで満遍なくオイルを垂らした。そのまま肩から腹へ、足先から太ももへ塗り込まれていく。4本の指がゆっくりと全身を這う感覚に、背中がゾクゾクとする。

また無意識に力が入っていたのだろうか、先生の「力抜いてくださいね」という優



しい声が頭上で響いた。何も意識せず眠ってしまったおうと力を抜き、彼等に身を任せた。その時、鎖骨あたりを揉み解していた先生の手が、胸の上を滑り、ブラを押し上げる乳首に、つんと当たった。

「んう……っ！」

反射的に身体が跳ね上がる。変な声が出てしまったが、先生も村上さんも何も言わず施術を続けているので、感じてしまった自分が恥ずかしかった。必死に身体がびくびくのを抑え声を我慢する。

すると、先生の手が両胸を包み込んだ。偶然手が当たったというよりも、明確に胸に触れ、そのまま揉みしだき始めた。

「えっ！？ あ、ちょ、ちよつと……っ」

思わず目を開けると、私を見下ろす先生と目が合った。先生は全く手を止めることなく、いかがされましたかと首を傾げた。村上さんも足のマッサージに集中しており、声をあげた私の方が変みたいで押し黙る。バストアップもお願いしたから、こんなマッサージをされているのかもしれない、と自分に言い聞かせた。それでも――

「んっ……ふ、う……っ、……っ」

先生の指が乳首に当たると同時に、どうしても声が漏れてしまいそうになる。必死に

唇を噛んで耐えていると、先生が下着の上から両乳首をぎゅうつと摘んできた。

「んうつ!? あつ、ちよつ……ま、まって……っ」

「このように乳首に刺激を与えることで、女性ホルモンが分泌されバストアップの効果が期待できますよ」

「え、あつ……わ、わか、りました……っ!」

「豊田さんは乳首をしっかり勃起させてくださっているので、非常にマッサージしやすいです。ありがとうございます」

「……っそ、そんな……!」

先生は微笑んで、親指と人差し指でくくくと乳首を弄った。オイルで透けてもはや意味をなくしているブラジャー。その布地を押し上げる乳首が、テラテラと濡れてひかり、触ってくださいと言わんばかりに勃起している。それを、先生がこよりを作るようにくくに弄る光景が、私の身体をより熱くさせた。

「ほら、下着の意味全然ないですよね? 見えますか? こんなに勃起してる乳首」

「……っやつ、やだあ……っ!」

「恥ずかしがることないですよ。女性としてとっても素晴らしいことですから。私もしっかりマッサージさせていただきますので、バストアップ頑張りましょうね」

「う……は、はい……っ」

先生は至って真面目な顔で説明するので、エッチに感じてしまうことが申し訳なくなる。しかし、先生が乳首を刺激するたびに、子宮の奥がムズムズとしてくるのが止められない。おまんこから、とろお……と膣液が溢れてきているのが自分でもわかった。私は、つい腰をかくかくと振って、じわじわと湧き上がってくる快感を逃そうとした。

すると、左足の付け根あたりをマッサージしていた村上さんが不思議そうに聞いてきた。

「豊田さん、さっきからピクピク腰振ってどうしました？」

「あっ……え、いえ……んう、は、……ん、」

「もしかしてお手洗いですか？ 一回止めます？」

「やっ……んあ……だ、だいじょうぶで、す……っ」

村上さんの優しい気遣いが、逆に恥ずかしくて涙が出そうになってくる。真面目な施術なのに、感じてしまう自分が恥ずかしかった。

すると先生が口を開いた。

「こら、村上くん。豊田さんは乳首の刺激で気持ちよくなってしまうただけだ。

察しなさい」

「~~~~っ!?!」

「あ、そうだったんですね。どうりでおまんこからヌルヌルしたのが垂れてきてるわけだ。シートに小さいシミも作っちゃうくらい気持ちよかったんですか?」

「~~~~っ!?! やっ、やだ……っ」

「どうなんですか、豊田さん? 乳首をくりくりされたら気持ちよくて、おまんこ濡らしちゃったんですか?」

先生は、さあ早くと言わんばかりに、乳首が伸びるように強く引っ張った。

「ひゃああ!?! あ、やっ……やめっ」

「私たちはお客様一人一人に適した施術を行いたいので、正直に感想を教えて欲しいんです」

「うあっ、ま、ま……って! まってえ……っ」

「そうですよ。豊田さん、どういう風に気持ちよくなったのか、僕たちにきちんと教えてください」

村上さんが、Vラインをすりすり指で撫でた。そんな簡単な刺激にすら体が震えてしまう。私は羞恥で声を震わせながら、小さく答えた。

「……せ、せんせ……に、……ちくび、くにくに……され、る……たびに……」

「うん、されたら？ どうなったんですか？」

「あうっ……お……まん、こ……じ、じんじんして……ぬれました……」

尻すぼみになりながらなんとか答えると、二人は微笑んで頷き、次の瞬間にするりと下着を取り払った。ほとんど意味をなくしていない下着だったが、取り払われてしまえば全裸だ。男性の前で丸裸になってしまい頭が真っ白になる。咄嗟に腕で胸と股間を隠そうとすると、先生に腕を掴まれる。

「施術の続きができませんよ、豊田さん」

「やつ！ あのっ、な、なんで！ せんせいっ！」

「すみません。驚かせてしまいましたね。スペシャルコースなので下着を取る必要があるマッサージを今から行いますので。バスタオルかけておきましょうね」

「そ、そんな……う、はい……」

先生は胸から下にバスタオルをかけてくれたが、ギリギリおまんこが隠れる程度だ。しかし、これ以上は何も言えず口をつぐんだ。

すると、村上さんがゆっくりと私の足を開き、おまんこの筋を撫で始めたのだ。

「えっ!?!」

驚いて体を起こそうとすれば、先生に肩を押さえつけられる。村上さんは膣液を指に絡めながら、くちゆくちゅと膣口からクリトリスまでを丁寧に撫でる。

「豊田さん、下半身の老廃物排出のマッサージをしますよ。先ほど両足の老廃物をマッサージでしっかり流しましたから、今度は身体を中心部分からそれを排出するんです」

「え、あ、でも、ま、まって……っ！」

「これがとっても足やせに効果的なんですよ」

村上さんはそう言っていると、おまんこに指を2本差し入れた。すでにしっかりと濡れそぼったおまんこは、にゅぷん……と容易く指を受け入れた。

「んやああっ!!」

「本当はオイル塗り込んでからなんですけど、豊田さんがすでにおまんこ汁ですっかり濡らしてくださってるんで」

「えあつ、やあつ……ひうつ、あ、」

「ほら、すごい下品な音出してるの聞こえますか？」

村上さんが指を鉤状にして、おまんこのナカを掻き出すように動かすたび、膣液と空気が混ざったような音が響いた。

——ぐぶつ、ぬぢゆう、ぐぶつ、ぐぶつ、ぬぢゆう……

「やあだあッ！ ひつ、ひやああッ、あ、あ、あ、」

「こら、村上くん。お客様に向かつて下品なんて言わないように」

「はい、すいません」

混乱して頭を振り乱す私の上で、二人が平然と会話をしている。

「まっで、やつ……ッ！ ゆ、ゆびッ！ とえて……んあッ！」

「豊田さん、施術で気持ちよくなることは自然なことです。マッサージがしっかり効いている証拠ですから。たくさん気持ちよくなってくださいね」

先生は優しく微笑むと、指の腹でくるくると乳首の先端を撫で始めた。時折、強く指を押し込まれ乳首をほじくられ、声も出せず背中をエビ反りにして耐える。気休め程度にかけられていたバスタオルが体から落ちたが、それを気にする余裕はもうなかった。

「ほら、豊田さん頑張って老廃物出しましょうね」

「あッ……!!?」

村上さんが、いきなり指の動きを早めた。膣内のお臍側を強い力で押し揉む動きに、腰がぶるぶる震える。乳首もいっぱい気持ちいいのに、おまんこにはキツ過ぎる快感

と排尿感が襲ってきて、頭がおかしくなりそうだった。

「いやあッ！　だつめえ、ひいっ！　ッ、んぐっ」

「駄目じゃないですよ。……あー、Gスポばんばんだ。これすぐ出ちゃいますね」

「あうううっ！　あ、やえ……んいっ！！」

「豊田さん、何か出そうだったらちゃんと私たちに教えてくださいね」

二人から与えられる刺激を必死で受け止めていると、先生の声が聞こえた。迫り上がってくる排尿感に、私は、太ももに力を入れて耐えながら必死に叫んだ。

「でぢやぐっ！　でぢやいますっ！　あ、あ、あ、とえて、とえてぐっ！！」

「ちゃんと覚えて偉いですね。このまま村上くんの指を感じていっぱい出しましょう」

「だぞっ！　だぞえっ！！　ぎっで！　あ、あつ、ほんとでぐっ、」

「豊田さん、顔真っ赤にして耐えるのすごい可愛い。こんなに指ぎゅうぎゅう締めつけてるんだから、早く出しちゃってください」

駄目押しと言わんばかりに、村上さんがもう片方の手でクリトリスを押し潰した。

「んぎっ！！！！？♡」と惨めな汚い声をあげた次の瞬間、

「おっ~~~~~~~~！！！！♡♡♡♡♡



絶頂と同時に、おまんこからブシューッと勢いよく透明な飛沫が上がった。その飛沫は、村上さんの腕はもちろん制服をぐつしよりと濡らすほどだった。

「うわ、潮えっぐい。一発で俺ビツシヨビシヨじゃん」

「村上くん」

「あ、すいません。……豊田さん、いっぱい老廃物出ましたね」

「……ッ！……♡♡……ッ！……♡♡♡……お……♡」

ギクンギクンと腰を強く振りながら、全身を震わせて絶頂の余韻に耐える私に、二人の会話は聞こえていなかった。

すると、村上さんが再び膣内の指を動かし始めた。

「あえッ！……!?♡なつ、なん、れっ！!?♡ひやあうっ！あッ！あえ！」

「まだまだ老廃物出ますから、出し切っちゃいましょうね」

「やつ!?!♡ いやああつ!! らえなのつ、らえつ、らえつ! でな、いづつ! もおでな、からあつ!」

「ふふふ、豊田さんいやいやばつか李は駄目ですよ。施術なんですから。先生、お願いします」

「はい。失礼しますね」

「だ、だめえっ、——んぶッ!??」

先生は村上さんの言葉に頷くと、乳首を弄っていた片方の手を私の口に差し込んだ。突然のことに目を白黒させて見上げると、先生は微笑んだまま中指と人差し指で喉奥をこちゅこちゅとくすぐった。苦しさ、なんとも言えないくすぐったい感覚に涙がこみ上げてくる。それに加えて、村上さんはおまんこを弄る手を止めてくれないので、喘ぎ声が汚い鳴咽となって漏れてくる。

「んぐぐっ! んぶ……おごっ!!」

「豊田さんが施術の邪魔をするので、お口を塞いでおきますね。喉奥をこうやってこちゅこちゅされるのは初めてですか?」

「おごっ!!♡ んぐおっ……っ!!! んぶおっ、」

「うわー、急におまんこの締め付け強くなりましたね。先生、豊田さん喉奥大好きみたいなのでもっとお願いします」

「……んぐおっ!!?!♡」

村上さんの指示に、先生がさらに喉の奥に指を進めた。喉仏に向かって、二本の指がおちんちんのように進んでくる。反射的に汚い声が喉奥から漏れ出てくる。

続きは、製品版でお楽しみくださいませ。

## とあるマッサージ店の無料モニター

発行日：2025年7月12日

発行者：ちひろ（ちひろの夜の図書館）

連絡先：chihiro.yoru@gmail.com

この作品は個人による創作であり、実在の人物・団体・特定の宗教等に関係ありません。無断転載、複写、複製、配布などの行為を固く禁じます。